

# 太宰治『駈込み訴へ』研究

——「旦那さま」とユダの対話をめぐって——

奥村七海

## 序論

太宰治『駈込み訴へ』は、一九四〇年二月一日発行の『中央公論』(第五十五年第二号)「創作・新人特選」欄に発表された短編小説である。<sup>①</sup>

作品は、『新約聖書』で描かれた、ユダがイエスを裏切る次の場面を取り上げている。

その時、十二人の一人で、イスカリオテのユダと言う者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたがたに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払った。  
(「マタイによる福音書」26:14-15)

右の引用は、『新約聖書』「マタイによる福音書」の引用であるが、「マルコによる福音書」、「ルカによる福音書」も同様に、ユダが「祭司長たち」の元へ行き、イエス・キリストを「引き渡す」ことを約

フェリス女学院大学日文学部紀要 第二十六号 (二〇二二年七月)

束した、という出来事だけが記されている。<sup>②</sup> 太宰治は、「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」のいずれにおいても非常に短いこの場面に着目し、ユダが「祭司長たち」へ向けて何を語ったのかを、ユダによる一人称の〈語り〉によって展開していく。つまり本作は、四福音書の物語をユダの認識を通じて〈語り〉によって再構成すること<sup>③</sup>で、聖書では明らかにされていない、ユダがイエスを裏切り、死に至らしめることとなった経緯と理由を描いた作品となっているのである。

作中には、ユダが「旦那さま」<sup>④</sup>と呼びかける密告の〈聴き手〉が存在しており、ユダの〈語り〉に対して何らかの反応を示していると思えらる箇所が十四箇所、確認できる。つまり、「旦那さま」が何らかの言葉を発し、それに対してユダが明らかに応答しているのである。「旦那さま」は具体的な台詞こそ書かれないものの、ユダの〈語り〉を通じて我々読者の前に立ち現れてくる、一人の登場

人物として作中に存在している。しかしながら、本作の研究史においては、「旦那さま」とユダとの応答に着目しようとしたものは極めて少ない。

具体的には、森厚子氏「太宰治『駄込み訴へ』について——語り」の構造に関する試論<sup>⑤</sup>、崔明淑氏「『駄込み訴へ』論——『ポリフォニー』的小説の聖書受容」、木村小夜氏「『駄込み訴へ』を読む——山岸外史「人間キリスト記」との接点から」、高塚雅氏「太宰治『駄込み訴へ』試論——『旦那さま』の不在」<sup>⑧</sup>の四つである。そのいずれもが、ユダの〈語り〉を中心として「旦那さま」がユダに及ぼした影響にわずかに触れるのみであると言えるだろう。

本論では、本作の研究史においてほとんど触れられることの無かった、「旦那さま」の存在が意味するものについて検討する。「旦那さま」の応答が推測できる十四箇所を、ユダがイエスの居所を語るまでの八箇所、「三十銀」と「商人」に言及する五箇所、「夜に囁く小鳥」<sup>①</sup>に言及する一箇所の三つの場面に分け、それぞれの場面でのどのような対話がなされたかを可能な限り再現し、本作において「旦那さま」が担う役割を明らかにする。また、イエスの居所を伝えた後であるにもかかわらず、ユダが繰り返し言及する「三十銀」「商人」「夜鳥の声」について、聖書本文の記載を参照しながら検討する。これらの手続きを踏まえ、ユダの裏切りが、「旦那さま」と

の対話によってどのように成し遂げられるのかを明らかにしたい。

## 一 「旦那さま」との対話

ユダの密告の〈聴き手〉である「旦那さま」は、具体的な描写を伴って登場する人物ではない。しかしながら、我々読者はユダの〈語り〉を通じて、「旦那さま」がユダと同じ空間・時間に存在しており、ユダの〈語り〉に対して何らかの反応を示していることを確認することができるのである。次に、作中で「旦那さま」の反応が推測できる十四箇所を引用する。

① 申し上げます。申し上げます。旦那さま。あの人は酷い。酷い。  
(一二五頁・傍線は論者による。以下同様。)

② はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。  
(同前)

③ はい、はい。落ちついて申し上げます。  
(同前)

④ 世の中の仇です。はい、何もかも、すっかり、全部、申し上げます。  
(同前)

⑤ 旦那さま。あの人は、私の女をとつたのだ。いやちがった！あの女が、私からあの人を奪つたのだ。ああ、それもちがふ。私の言ふことは、みんな出鱈目だ。一言も信じないでください。

い。わからなくなりました。ごめん下さいまし。ついつい根も葉も無いことを申しました。そんな浅暮な事実なぞ、みちんも無いのです。醜いことを口走りました。

(二三三頁)

⑥旦那さま、泣いたりしてお恥づかしう思ひます。はい、もう泣きませぬ。

(二三三頁)

⑦はい、はい。落ちついて申し上げます。

(同前)

⑧やがてあの人は宮に集る大群の民を前にして、これまで述べた言葉のうちで一ばんひどい、無礼傲慢の言葉を、滅茶苦茶に、わめき散らしてしまつたのです。左様。たしかに、やけくそです。

(二三六頁)

⑨ああ、小鳥が啼いて、うるさい。今夜はどうしてこんなに夜鳥の聲が耳につくのでせう。私がここへ駈け込む途中の森でも、小鳥がビイチク啼いて居りました。夜に囀る小鳥は、めづらしい。(中略) ああ、私はつまらないことを言つてゐます。ごめん下さい。旦那さま、お仕度は出来ましたか。

(二四〇頁)

⑩おや、そのお金は？ 私に下さるのですか、あの、私に、三十銀。(中略) いや、お断り申しませう。殴られぬうちに、その金ひつこめたらいでせう。

(二四一頁)

⑪金が欲しくて訴へたのでは無いんだ。ひつこめろーい

え、ごめんなさい、いただきますせう。さうだ、私は商人だつたのだ。金銭ゆゑに、私は優美なあの人から、いつも軽蔑されて来たのだつけ。いただきますせう、私は所詮、商人だ。

(同前)

⑫私は、あの人を愛してゐない。はじめから、みちんも愛してゐなかつた。はい、旦那さま。私は嘘ばかり申し上げます。

(同前)

⑬私は、金が欲しさに、あの人に附いて歩いてゐたのです。お、それにちがひ無い。あの人、ちつとも私に儲けさせてくれないと今夜見極めがついたから、そこは商人、素早く寝返りを打つたのだ。(中略) 銀三十、なんと素晴らしい。いただきますせう。私は、けちな商人です。欲しくてならぬ。はい、有難う存じます。

(同前)

⑭はい、はい。申しおくれました。私の名は、商人のユダ。へつへ。イスカリオテのユダ。

(同前)

本作は、作品の全編を通して、「旦那さま」に向けられたユダの一人称の〈語り〉によつて展開される。一方で、引用①から⑭の傍線部においては、「旦那さま」がどのような反応を示し、ユダにどのような言葉を発したかを類推することが出来る。また、これらの「旦那さま」との対話は、三つの場面に分けることが出来る。イエ

スの居所を「旦那さま」に述べるまでの引用①から⑧までの八箇所、「商人」と「三十銀」をめぐる対話が展開される引用⑩から⑭までの五箇所、「夜に囁く小鳥」へ言及する引用⑨の一箇所である。次節から、これらの三つの場面について検討していく。

## 二. ユダの密告と感情吐露

ユダの〈語り〉は、そのすべてが「旦那さま」に向けられたものであるが、そこにはユダの内面の葛藤や心情の独白といった、密告を超えた内容が含まれている。ここでは、前節で挙げた引用①から⑧の、イエスの居所を「旦那さま」に伝えるまでの〈語り〉を検討し、「旦那さま」の担う役割について考察する。

次の引用は、まさにユダが「旦那さま」の元へ「訴へ」<sup>12</sup>出た、作品冒頭部における〈語り〉である。

① 申し上げます。申し上げます。旦那さま。あの人は酷い。酷い。

② はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。

③ はい、はい。落ちついて申し上げます。

④ 世の中の仇です。はい、何もかも、すっかり、全部、申し上げ

げます。

ユダの〈語り〉は、同様の内容を繰り返しながら展開されている。引用①では、「申し上げます」が二度繰り返されることで、ユダの〈語り〉が差し迫ったものであり、「あの人は酷い」という「訴へ」がイエスから受けた仕打ちを想起させる。引用②の「はい」というユダの応答によって、現にユダが「訴へ」ているイエスその人の罪について、「旦那さま」から問いかけられたことが示されている。しかしながら、ユダはここで侮蔑さえ含みながら「厭な奴」と答えられている。好悪に基づいた主観的な判断を下し、イエスの罪の有無については「悪い人」と曖昧に答えているのである。

注目すべきは、引用②において、ユダの口調が変化している点であろう。イエスの罪の有無について答えた後で、ユダは「我慢ならない」と語る。「旦那さま」に語りかける際に用いられていた敬体から、常体へと変化しているのである。続く「生かしておけねえ」は、語尾の変化が示すように、「旦那さま」へ向けていた敬体ではなく、常体の〈語り〉とも明らかに異なっている。ユダがイエスに向ける強い感情がさらけ出されており、「旦那さま」が求めている密告の内容そのものとは言い難い。つまり、密告を超えたユダの感情の独白としての度合いがより強くなっているのである。

引用③では、「落ち着いて申し上げます」と再び敬体に戻る。ユ

ダの「はい。はい」という相槌は、〈語り〉に対して「旦那さま」が「落ち着くように促したことを明らかにしており、「はい」を契機に「旦那さま」に向けた「訴へ」に戻っているのである。引用④では、「旦那さま」からイエスについて何らかの問いかけがあったことが推察される。ユダは「旦那さま」の問いに対して、「何もかも、すつかり、全部、申し上げます」と答え、イエスについて知り得る情報を全て「旦那さま」に語ることを宣言している。この時点でユダの〈語り〉は、イエスの罪と居場所という、求められている情報のみを語るものではなくなる。言い換えれば、イエスを裏切り、密告するに至るまでの全てを語るものであることが、「旦那さま」に対する返答を通じて我々読者の前に明らかにされているのである。

引用②が示すように、ユダの〈語り〉の内容は、イエスの居所を「旦那さま」へ知らせるための密告そのものである敬体の〈語り〉と、密告の内容から離れた常体による〈語り〉が明らかに使い分けられている。密告を超えた〈語り〉に陥ったユダは、「旦那さま」との対話という形をとることによって、密告の体裁を保とうとするのである。

次に、ユダの〈語り〉が密告の内容を離れ、自身の感情吐露に陥った時、「旦那さま」がどのように反応するのか確認する。次の引用

は、「ベタニヤのシモンの家」での出来事について回想した後のユダの〈語り〉である。

⑤ 旦那さま。あの人は、私の女をとつたのだ。いやちがつた！  
あの女が、私からあの人を奪つたのだ。ああ、それもちがふ。  
私の言ふことは、みんな出鱈目だ。一言も信じないでください。  
い。わからなくなりました。ごめん下さいまし。ついつい根  
も葉も無いことを申しました。そんな浅暮な事実なぞ、みぢ  
んも無いのです。醜いことを口走りました。

傍線部以前の〈語り〉では、「旦那さま」と呼びかけているものの、密告の内容を離れている。イエスと「マリヤ」に向けた「ジェラシイ」<sup>⑤</sup>に言及し、「みんな出鱈目だ」までの常体の〈語り〉で、「ジェラシイ」が何を原因とするのかを探ろうとしているのである。ところが、「ジェラシイ」の正体を探ろうとする〈語り〉は、正解の所在が「わからなくなり」、行き詰る。そこでユダは「一言も信じないでください」と敬体の〈語り〉に戻り、「旦那さま」に意識を向ける。「旦那さま」の存在に意識を向けた時、ユダは常体による内面の葛藤や、感情的な独白を中断するのである。さらに、「ごめん下さいまし」という謝罪から、「旦那さま」がユダの〈語り〉に介入したことが分かる。「旦那さま」は、密告を離れ、ユダ自身の内面の葛藤の独白へと陥った〈語り〉を、密告の内容へと引き戻

し、ユダが本来語るべきであるはずのイエスの居所を聞き出そうとして  
しているのである。

また、ユダは「根も葉も無いこと」、「醜いことを口走」つたと語っている。イエスと「マリヤ」に向けた「ジエラシイ」を語った引用⑤は、ユダの〈語り〉が「根も葉も無いこと」を「口走る」ほどに支離滅裂な、常に揺らぎ続ける〈語り〉であることを明らかにしているのである。

イエスと「マリヤ」に「ジエラシイ」を向け、自らの理想とする「美しい人」<sup>⑥</sup>としてのイエスの像に綻びが生じたことと認識したユダの〈語り〉は、さらに感情吐露へと傾く。「旦那さま」の介入を受けたにもかかわらず、引用⑤の直後には次のように語っているのである。

いづれは殺されるお方にちがひない。またあの人だつて、無理に自分を殺させるやうに仕向けてゐるみたいな様子が、ちらちら見える。私の手で殺してあげる。他人の手で殺させたくはない。あの人を殺して私も死ぬ。

(二二二—二三三頁)

二重傍線部が明らかにするように、ユダは畳みかけるように「あの人を殺して私も死ぬ」という決意を語っていく。常体が用いられていることから、ユダは明らかに「旦那さま」へイエスの居所を伝えるという本来の目的を離れているのである。再び感情吐露へと陥ったユダの〈語り〉に対して、「旦那さま」は次のように反応を

示す。

⑥旦那さま、泣いたりしてお恥づかしう思ひます。はい、もう泣きませぬ。

⑦はい、はい。落ちついて申し上げます。

引用⑥では、「泣い」ていることを「旦那さま」に指摘され、引用⑦では「落ちつく」ように宥められている。「旦那さま」は、ユダの感情の起伏に寄り添いながら、感情吐露に傾いたユダの〈語り〉を再び密告へと引き戻そうとしているのである。引用⑦で「落ちつく」よう宥められたユダは、ようやく本来語るべきであるはずのイエスの様子について語る。「エルサレム宮」<sup>⑧</sup>において、フアリサイ派を批判したイエスの振る舞いを語った箇所が引用⑧である。

⑧やがてあの人には宮に集る大群の民を前にして、これまで述べた言葉のうちで一ばんひどい、無礼傲慢の言葉を、滅茶苦茶に、わめき散らしてしまつたのです。左様。たしかに、やけくそです。

ここでは、敬体の〈語り〉によって回想していることから、密告の内容を語ることに徹していると言えるだろう。イエスの振る舞いについて「やけくそ」と批判的な評価を下しているのであるが、傍線部の「左様」という発言から分かるように、イエスの言動を「やけくそ」と批判したのはユダ自身ではない。イエスの振る舞いを

「やけくそ」と評したのは、「旦那さま」であり、ユダが「旦那さま」による評価に対して「左様」と同意を示しているのである。つまり、「旦那さま」はユダの思考を汲み、ユダがイエスに向けようとした評価に先行する形で「やけくそ」と批判的な評価を下しているのである。

「旦那さま」は、ともすれば感情吐露に終始しかねないユダの〈語り〉を密告へと引き戻す存在である。「旦那さま」はイエスについて「訴へ」出て来たユダに、イエスの居所を語らせるべく、時に激しく揺れ動くユダの感情に寄り添い、ユダの言葉を受け入れる。つまり、「旦那さま」は〈聴き手〉に徹し、ユダの望む言葉を掛けながら、密告の〈語り〉を催促するのである。

「旦那さま」の目的がイエスを捕えることである以上、イエスの居所を語ると申し出たユダに対して、ユダが望む態度を示すことは当然であろう。しかしながら、ユダはこうした態度をイエスにこそ求めており、一方のイエスは、ユダの感情の揺れ動きに触れることはなかつた。洗足の場面の回想において、イエスがユダに対してどのように反応したのかが語られている。

私があの人を売らうとたくらんでゐた寸刻以前までの暗い気持ちを見抜いてゐたのだ。けれども、その時は、ちがつてゐたのだ。断然、私はちがつてゐたのだ！ 私は潔くなつてゐたのだ。

私の心は変わつてゐたのだ。ああ、あの人はその心を知らない。それを知らない。ちがふ！ ちがひます、と喉まで出かかつた絶叫を、私の弱い卑屈な心が、唾を呑みこむやうに、呑みくだしてしまつた。言へない。何も言へない。(一三九頁)

ユダは、イエスの洗足を「寂し」<sup>19</sup>さによる行為であると捉える。イエスの「寂し」さを見たと認識したユダは、「寸刻以前までの暗い気持ち」、つまりイエスを売るという決断を覆し、イエスを弟子たちとともに「護り、一生永く暮らして行」<sup>20</sup>くという望みを抱いていた。ところが、「みんなが潔ければいいのだが」<sup>21</sup>という言葉を受けて、「潔くなつてゐた」際に抱いた望みを、自ら疑うことになるのである。

ユダが既に語っているように、イエスが「自分を殺させるやうに仕向けてゐる」点を踏まえれば、ユダの心情の変化に対して反応を示さない、というイエスの態度は、ユダに自らを「引き渡」させようとするイエスの誘導と考えられる。「ローマ信徒への手紙」に言及されるように、イエス・キリストは「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められ」(1..4)ている。つまり、一度死を迎え、復活することによって「救い主」<sup>22</sup>イエス・キリストとなるのである。少なくとも、ここでイエスがユダの心情の変化に気が付き、ユダに寄り添う態度を見せていたとすれば、ユダは自らの「変わつ

てゐた「心」をイエスに対して言葉にすることが出来たはずであり、ユダは密告へ至らなかつた。イエスは「祭司長たち」の元へ「引き渡」されず、十字架に掛かることもなくなる。「救い主」イエス・キリストとなることが不可能になるのである。すなわち、イエスが示した態度は、ユダの密告によって自らを「引き渡」させようとする、イエスの意志の表明であつたとと言えるだろう。

ユダは、イエスの態度を受けて、「言へない。何も言へない」と、自らの「心」を言葉としてイエスに伝えることを躊躇している。ユダは既に、イエスの言葉について、「あの人は嘘つきだ。言ふこと言ふこと、一から十まで出鱈目だ。私はてんで信じてゐない」、<sup>(24)</sup>「私は、あの人の言葉を信じません」と語っている。イエスの「言葉」に不信を抱いてしまつたばかりに、ユダはイエスに対して語る「言葉」を持ち得なくなつていたのである。例え、「復讐」<sup>(25)</sup>に替わるほどの強い「愛」<sup>(26)</sup>をイエスに向けていたとしても、イエスを前にした際に「何も言へな」<sup>(27)</sup>くなつてしまふ以上、ユダは「旦那さま」に向けて語ることしか出来ないのである。

本作は、「旦那さま」が密告の内容を超える〈語り〉さえ受け入れつつ、ユダの〈語り〉を促すことで、ユダがどのようにして密告に駆り立てられたのか、またユダがどのようにして密告を成し遂げていくのかを我々読者の前に明らかにしていく。

また、ユダは〈聴き手〉に徹する「旦那さま」を相手とした密告の場を利用し、自らの認識を自由に二転、三転させる。イエスその人に伝えることの出来なかつた想いを言葉にしていくのである。皮肉なことに、ユダが「誰よりも愛してゐ」<sup>(28)</sup>ると語つたイエスを、「捕らへて、棒で殴つて素裸にして殺す」<sup>(29)</sup>であろう「旦那さま」に向けて、あたかもイエスに語るかのように、自らの想いを語っていくのである。ユダの〈語り〉の行為は、いわば〈聴き手〉に徹し、ユダの〈語り〉を促す「旦那さま」に、イエスに語りたかつた想いを語るといふ代償行為なのである。

### 三. 「商人のユダ」から「イスカリオテのユダ」へ

ユダの〈語り〉は時として密告の内容を離れ、イエスへの想いを語る。さらに、作品の終盤に近付くと、「小鳥」に意識を向ける、「三十銀」の受け取りを拒否するなど、ユダの内面の揺らぎが敬体によって表現される箇所が見られる。つまり、常体による感情吐露と、敬体による密告という形で隔てられていたユダの〈語り〉が、さらに交錯していくのである。ここでは第一節に挙げた、「三十銀」と「商人」をめぐる「旦那さま」との対話が展開される引用<sup>(10)</sup>から<sup>(14)</sup>に着目し、ユダがなぜ「三十銀」と引き換えにイエスを「引き渡」



すことになったのかを検討する。

ユダがイエスの居所を「旦那さま」に伝えた後、「旦那さま」は密告の対価である「三十銀」を渡そうとする。ユダが「旦那さま」から差し出された「三十銀」に対してどのように反応したかを確認する。

⑩おや、そのお金は？ 私に下さるのですか、あの、私に、三十銀。(中略) いや、お断り申しませう。殴られぬうちに、その金ひつこめたらいでせう。

傍線部から、「旦那さま」が「三十銀」を差し出そうとする様子がユダの視界に入ったことが分かる。「旦那さま」の差し出した「三十銀」について、「私に下さるのですか」と確認するのであるが、ここでユダは「お断り申しませう」と、これまで伝達を目的とした際に用いられていた敬体の〈語り〉によって、受け取りを拒否している。続けて、ユダによる受け取りの拒否は、さらに感情的なものに変わっていく。

⑪金が欲しくて訴へたのでは無いんだ。ひつこめる！ いえ、ごめんなさい、いただきます。さうだ、私は商人だつただのだ。金銭ゆゑに、私は優美なあの人から、いつも軽蔑されて来たのだつけ。いただきますせう、私は所詮、商人だ。

ここでのユダの〈語り〉は、現時点で「旦那さま」に向けている

感情を語っている。自らの感情吐露に用いられてきた常体をも超えた、「金が欲しくて訴へたのでは無いんだ。ひつこめる！」という、罵りとも言える強い語調を「旦那さま」に向けているのである。ところが、すぐさま態度を変え、「三十銀」を受け取るようになる。ユダの「いえ、ごめんなさい」という謝罪からは、「旦那さま」がユダに対して何らかの形で「三十銀」を受け取るように促したことが推測できる。ユダは、二重傍線部で示したように「商人」であることに言及し、「三十銀」を受け取るのである。

「さうだ、私は商人だつただのだ」という言葉は、密告が敬体、感情吐露が常体によって語られていくのであるとすれば、ユダの感情吐露として捉えられる。さらに、「商人だつた」という言葉が示すように、ユダ自らが「商人」であつたことそれ自体を忘れていたかのようにある。作品の序盤で、ユダは自ら「商人ではありませんが」「精神家と言ふものを理解してゐる」と語っていた。「精神家」とは性質の異なる「商人」であることを自覚していたにもかかわらず、ユダはこの〈語り〉の中で、自らをイエスと等しい「精神家」と錯覚していったと捉えられるだろう。さらに、「所詮、商人だ」という〈語り〉からは、ユダが「商人」であることそれ自体を否定的に捉えていることが明らかである。

そもそも、ユダはなぜ「商人」であることに言及し、「三十銀」

を受け取ったのであろうか。本作の典拠となる四福音書には、ユダが「商人」であるという記載は存在しない。ところが、太宰治はユダを「商人」として描き、「金が欲しくて訴へたのではない」ユダに、「三十銀」を受け取ることを選ばせているのである。これには『旧約聖書』の記載が大きく関わると考えられる。聖書本文での「三十銀」の記載を確認する前に、『旧約聖書』と『新約聖書』の關係性を整理したい。

『旧約聖書』は、イスラエルの民と「神」とが、モーセを介して結んだ契約と、「律法」の遵守について記している。また、「神」によるイスラエルの民に対する「裁きの到来」と「赦し」が「預言書」の形式で収録される。『新約聖書』は、『旧約聖書』「預言書」がイエス・キリストによって「成就」した出来事を描く。

イエス・キリストは、『旧約聖書』において描かれた「神」とイスラエルの民との間の「契約」、「律法」、「神」による「裁き」と「赦し」について、当時の共同体において疎外されてきた「罪人」、「悪霊に憑かれた人」、「罪深い女」、「異邦人」をも射程に含みつつ教えを説いている。対象となる存在を拡大した「新しい契約による救いの成就」を記すのが『新約聖書』なのである。イエス・キリストの教えの内容は『旧約聖書』に記載された「律法」を敷衍して語るものであり、イエス・キリストの行動は『旧約聖書』に記載された

「預言」を「成就」するものである。『旧約聖書』に語られた「預言」や「律法」が改めて『新約聖書』で言及される箇所は、並行箇所と称される。

本作でも「エルサレム宮」の場面において、イエスが『旧約聖書』の記載に触れつつ、「予言されてある通りの形」と自らの行動について説明している。このことから、少なくとも太宰治は、『旧約聖書』と『新約聖書』の關係を理解していたと考えられるだろう。

『新約聖書』と『旧約聖書』の關係を踏まえ、「駈込み訴へ」においてユダが受け取ることとなる「三十銀」と、「商人」という自己規定に着目する。本作の原典である『新約聖書』では、「マタイによる福音書」にのみ、具体的な金額である「銀貨三十枚」(26・15)の記載が見られる。荒井猷氏によると、「マタイによる福音書」における「銀貨三十枚」の出典は、『旧約聖書』「ゼカリヤ書」の記載である。

私は彼らに言った。「もし、あなたがよいと思うなら、私に賃金を支払え。そうでなければ、払わなくてもよい。」彼らは私の賃金として銀三十シケルを支払った。主は私に言われた。「私が彼らによって値踏みされた尊い価を、陶工に投げ与えよ。」そこで私は、銀三十シケルを取り、それを主の神殿で陶工に投げ与えた。

(ゼカリヤ書11:12-13)

「ゼカリヤ書」の記載の主語である「私」とは、「羊の商人」のために「屠るための羊の群れを育てる」（ゼカリヤ書11・4）羊飼いである。荒井猷氏は、「マタイによる福音書」の文脈では、「羊の商人たち」を「祭司長たち」に、「値踏みされた」羊飼いをイエス・キリストに、さらに「値踏みした」、「銀貨三十枚を受け取った彼ら」をユダと「祭司長たち」に当てはめることが出来ると解説している。<sup>39</sup> 彼らを「羊の商人」として捉えたとき、イエス・キリストが「値踏み」され、「銀三十」の価値を付与されることはすでに「ゼカリヤ書」に預言されている。つまり、イエス・キリストが「銀貨三十枚」によって身柄を「引き渡」されることは、マリアによる塗油や、ユダが「パン」によって裏切ることと同様、成し遂げられなければならぬ。<sup>40</sup> 『旧約聖書』の「預言」なのである。

何よりも、ユダは既に「裏切りの宣告」の場面において、イエスによって半ば強制的に「パン」を「口に押し入れ」<sup>41</sup>られたことで、イエスの生死の問題を託されている。ユダはこれらの状況を踏まえ、「さうだ、私は商人だつたのだ」と、自らに課せられた「羊の商人」という役割に思い至つたのである。一方で、ユダは「金が欲しくて訴へたのではない」と語る。ユダの感情と、『旧約聖書』の「預言」に矛盾が生じているのである。ユダは「商人」に言及した引用⑩・⑪に続く、引用⑫から⑭の三箇所を「商人」であることを自ら

に言い聞かせるかのように語っている。

⑩私は、あの人を愛してゐない。はじめから、みちんも愛してゐなかつた。はい、旦那さま。私は嘘ばかり申し上げました。

⑪私は、金が欲しさに、あの人に附いて歩いてゐたのです。お、それにちがひ無い。あの人、ちつとも私に儲けさせてくれないと今夜見極めがついたから、そこは商人、素早く寝返りを打つたのだ。（中略）銀三十、なんと素晴らしい。い、ただきませう。私は、けちな商人です。欲しくてならぬ。はい、有難う存じます。

⑫はい、はい。申しおくれました。私の名は、商人のユダ。へつへ。イスカリオテのユダ。

引用⑫では「旦那さま」に対して「嘘ばかり申し上げ」たことを明らかにしている。続けて、引用⑬においてこれまで「訴へ」てきたイエスに向けて「愛」を否定するにとどまらず、「金が欲しさに、あの人に附いて歩いて」来たことを告白するのである。ここでのユダの発言は、ユダ自身が導き出した結論ではない。ユダはすでに「金が欲しさ」を「訴へ」の理由から除いている。つまり、ユダは「旦那さま」の反応を受けたことによって「金が欲しさに、あの人に附いて歩いてゐた」という結論に至るのである。

「旦那さま」はユダの〈語り〉に介入し、ユダがイエスへ向けていた「愛」こそが「嘘」であり、「金が欲しさ」を理由にイエスに付き従ってきたという一つの仮定を提示したのである。「おお、それにちがひ無い」という言葉は、「旦那さま」によって示された仮定を、ユダが受け入れたことを意味する。ユダは、「旦那さま」が示す仮定と、今まさに自らが臨んでいる状況とを、『旧約聖書』「ゼカリヤ書」に記された「預言」、そしてイエスを救い主イエス・キリストにしようとする「神」の意志の中に落とし込んでいくのである。ユダは「神」とイエスによって要請された「羊の商人」としての役割に、極めて自覚的に取り込まれていくのである。

ユダは「あの人が、ちつとも私に儲けさせてくれない」から、「儲けさせてくれ」る人間に「寝返」という「商人」の論理によって、密告の動機のみではなく、イエスにこれまで附き従ってきた理由をも「金が欲しさ」へと歪めていく。「旦那さま」の介入によって、イエスを引き渡すにあたって抱えた矛盾を解消したユダは、「はい、有難う存じます」とイエスの対価となる「三十銀」を受け取り、「商人のユダ」という名乗りに到達するのである。

イエスを裏切り「三十銀」に換える存在である、「商人のユダ」という位置づけを、ユダは「旦那さま」との対話の中で獲得したと言えらるだろう。太宰治はユダの〈語り〉そのものを、十二弟子の一

人であったユダが、「裏切り者」という批判と共に語り継がれるイスカリオテのユダへと変容する過程として提示して見せたのである。

「商人」への言及が意味するのは、ユダが「預言」の「成就」という極めて重要な役割を担うことの強調である。「駈込み訴へ」における「商人」というユダの自己規定は、他の弟子ではなく、イエスへ「愛」を向けて来たユダこそが、イエスの望みの達成に与していく存在として選ばれていることをも意味するのである。

#### 四、「復讐」の行方

イエスを裏切り、「三十銀」に換えるというユダの行為は、「神」とイエスの意志によって導かれたものであった。前節で指摘したように、ユダは「三十銀」と「商人」をめぐる対話の中で自らが「神」とイエスの意志に取り込まれていることを自覚するのである。「旦那さま」に向けた密告を開始するよりも以前に、既に「神」によって誘導されていると考えられる。ここでは、第一節で挙げた「小鳥」の「声」に言及する引用⑨について検討し、ユダの密告がいかにして成し遂げられていくかを考察する。

密告を終え、「三十銀」の受け取りを拒否する直前で、ユダが「小

鳥」の「声」に耳を傾けたのは、次の引用⑨の場面である。

⑨ああ、小鳥が啼いて、うるさい。今夜はどうしてこんなに夜の  
鳥の声が耳につくのでせう。私がおこへ駢け込む途中の森で  
も、小鳥がビイチク啼いて居りました。夜に轉る小鳥は、め  
づらしい。(中略) ああ、私はつまらないことを言つてゐま  
す。ごめん下さい。旦那さま、お仕度は出来ましたか。

ユダは「旦那さま」に向けて「夜に轉る小鳥」について語る。こ  
れまで密告に用いてきた敬体の〈語り〉によつて、密告から離れた  
内容を語っているのである。「ごめん下さいまし」という謝罪が明  
らかにするように、またしても「旦那さま」がユダの〈語り〉に介  
入している。「旦那さま」は、「小鳥」への言及が「つまらないこと」、  
つまり求められている〈語り〉から逸れるものであることを指摘し  
たのである。介入を受けたユダは、「お仕度は出来ましたか」と、  
「旦那さま」に求められている、イエスの元へ「御案内申し上げます」<sup>(46)</sup>  
という目的に戻るのである。

また、「私がおこへ駢け込む途中の森でも」その声は聞こえてい  
たというのであるから、イエスへ向ける想いを「旦那さま」に語り  
続け、「羊の商人」としての自らの役割に思い至るまでの間にも、  
「小鳥」の「声」は聞こえていたはずであろう。しかしながら、今  
まさに「旦那さま」を伴つてイエスの元へ向かおうという時に、ユ

ダは初めて「小鳥」の「声」に言及する。ユダの〈語り〉の〈聴き  
手〉に徹し、必要に応じて反応を示す「旦那さま」とは異なり、明  
らかなノイズが差し挟まれているのである。ユダはなぜ、「旦那さ  
ま」から「つまらないこと」と指摘されたであろう「小鳥」の「声」  
に、密告が終えられようとしているこの瞬間に言及したのであるう  
か。

ユダが注意を向けた「小鳥」について、大國眞希氏は「夜啼く  
鳥、夜啼き鳥、すなわちナイチンゲールは、密告する者、裏切り者  
の意味も有する」と指摘している<sup>(46)</sup>。つまり、作中にノイズとして響  
く「夜鳥の声」は、ユダの裏切りを象徴する「声」であったと考え  
られる。さらに、「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」では、  
ユダの裏切りの行為そのものが「ユダの中に、サタンが入った」(ル  
カ22・3・ヨハネ13・27)<sup>(46)</sup>ことに起因しているとされ、キリスト教  
芸術においては「ユダの中に、サタンが入る」場面を、鳥がユダの  
口の中に入る様子によつて描くものが存在している<sup>(47)</sup>。つまり、『駢  
込み訴へ』においてユダが言及する「夜鳥」とは、ユダの裏切りを  
決定的なものにする悪魔であったと捉えられる。

しかしながら、ユダが「夜鳥」の声に言及する七箇所において、  
「夜鳥」と述べたのは一箇所のみであり、残る六箇所については「小  
鳥」と発言しているのである。本作においては、あくまで「小鳥」

であることが強調されていると言えるだろう。太宰治があえて「小鳥」と表記し、ユダが「小鳥」の「声」に耳を傾けるのは、ユダが紛れもなく「神」の意志のもとにあることの示唆ではないだろうか。

『旧約・新約聖書大事典』に拠れば、「鳥」とは「人間の行為（創8…8—12）や宗教観や道德観（ヨブ12…7、エレ8…7、マタ6…26、10…29、ルカ12…6）にとつて〈予兆〉的な意味を持つ」とされる。『新約聖書』には、「五羽の雀」の「二羽さえ、神の前で忘れられてはいない」（マタイ10…29・ルカ12…6）<sup>(50)</sup>というイエス・キリストの教えが記されている。

イエス・キリストが「鳥」を引き合いに出しながら、「雀」の「一羽さえ、神の前で忘れられてはいない」ことを語るのであるから、本作における「夜に囀る小鳥」でさえも、「忘れられてはいない」ことは明らかである。さらに、その「小鳥」の「声」に耳を傾けたユダでさえも、同様に「神の前」で「忘れられてはいない」はずであろう。ここで差し挟まれる「夜に囀る小鳥」の「声」は、まさにユダを揺さぶり続け、ユダの意志の及ばぬところでユダを誘おうとしている「神」の意志の表れである。

現に、ユダはイエスを「下役たちに引き渡す」にあたって次のように語っている。

ほかの人の手で、下役たちに引き渡すよりは、私が、それを為

さう。(中略) 私の義務です。私があの人を売つてやる。つらい立場だ。誰がこのひたむきの愛の行為を、正当に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は、純粹の愛だ。人に理解してもらふ為の愛ではない。(二三六頁)

「マリヤ」による塗油行為を目の当たりにしたユダは、第一節で指摘したように「あの人を殺して私も死ぬ」と語っていた。イエスを死に至らしめる行為を、あたかも心中かのように語っていたのである。ところが、ここではイエスを「下役たちに引き渡す」行為を、「義務」・「愛の行為」として意味付ける。さらに、「人に理解してもらふ為の愛ではない」と他者による「理解」を拒んでいく。これは、「春の海辺」<sup>(51)</sup>でのイエスとユダの対話に呼応していると考えられる。

「(前略) 寂しさを、人にわかつて貰はなくても、どこか眼に見えないところにあるお前の誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら、それでよいではないか。さうではないかね。寂しさは、誰にだつて在るのだよ。」 (二二七頁)

イエスは、ユダに対して「お前の誠の父」つまり「神」による理解を望むよう、ユダに論じている。一方のユダはイエスの言葉に対して「天の父にわかつて戴かなくても、(中略) ただあなたお一人に「おわかりになつてゐて」<sup>(52)</sup>欲しいと望むのである。

この時点でのユダは、イエスを「人」であると捉えている。また、ユダは密告の冒頭でイエスとユダ自身について、「人と人との間に、そんなにひどい差別はない筈だ」と語っている。さらに、作品終盤においても、ユダはイエスをあくまで「人」として捉えているのである。「小鳥」への言及に続く、ユダの〈語り〉を引用する。

旦那さま、旦那さま、(中略) 私は今夜あのひと、ちゃんと肩を並べて立つてみせます。あの人を怖れることは無いんだ。卑下することは無いんだ。私はあのひとと同じ年だ。同じ、すぐれた若いものだ。

(一四一頁)

イエスに促された「羊の商人」という役割を自覚しても尚、ユダはイエスを「あのひと」と呼び、あくまで一人の人間として捉えているのである。二重傍線部に見られる「あのひとを怖れることは無い」「卑下することは無い」という言葉が明らかにするように、ユダはイエスを「怖れ」、自らを「卑下」している。ユダがイエスとの間に埋めることの出来ない決定的な隔たりがあることを自覚していること、またイエスに対して脅威とも言える何ものかを感じていることは明らかであろう。イエスに対する「怖れ」と自己「卑下」を覗かせた後に、「同じ、すぐれた若いものだ」と語っているのであるから、ユダがいくら「同じ」であることを語ろうとしても、かえって「同じ」ではあり得ないことが浮き彫りにされていくのである。

むしろユダは、「厭な奴」、「嘘つき」と、徹底的に貶めながら語ってきたにもかかわらず、イエスを「怖れ」ずにはいられないのである。

キリスト教の教義の上では、イエス・キリストと「神」とは同一視されており、「ヨハネによる福音書」には「父の懐にいる独り子である神」(ヨハネ1・18)と記載されている。つまりイエス・キリストは、「父の懐にいる独り子」にして「神」なのである。「神」の「独り子」としてのイエスの理解について、「フィリピ信徒への手紙」には次のように記されている。

キリストは／神の形でありながら／神と等しくあることに固執しようとは思わず／かえって自分を無にして／僕の形をとり／人間と同じ者になられました。／人間の姿で現れ／へりくだって、死に至るまで／それも十字架の死に至るまで／従順でした。／このため、神はキリストを高く上げ／あらゆる名にまさる名を／お与えになりました。／それは、イエスの御名によって／天井のもの、地上のもの、地下のものすべてが／膝をかがめ／すべての舌が／「イエス・キリストは主である」と告白して／父なる神が崇められるためです。

(フィリピ信徒への手紙2・6-11)

原口尚彰氏は、この記載について「キリストが神に等しい存在で

あることを前提に「人とな」り、「十字架の死」の後に、「神」が「キリストを復活させ」、「神に等しい名を与え」たことを述べるものであると解説している。<sup>(52)</sup>

つまり、イエス・キリストは「神に等しい存在でありながら、「神」に「従順」であり「神の意志を行う」者として「人間の姿で現れ」た存在である。イエス・キリストは、『旧約聖書』『預言書』の「成就」のため、言い換えれば「神と人が和解し、本来の関係を回復するため」<sup>(53)</sup>に訪れ、「十字架の死」と「復活」によって「神に等しい名」を得ることとなるのである。

『駈込み訴へ』において、イエスについて「たいした違いが無い」と語るとは、超越的な存在である「神」の「独り子」であり、「神に等しい」存在であるイエス・キリストその人を「ただの人」<sup>(54)</sup>として語ることに外ならない。太宰治は、「マタイによる福音書」においては「首をくくって」<sup>(55)</sup>(27:9) 死んだとされ、「使徒言行録」においては「体が真つ二つに裂け、はらわたがみな出て」<sup>(56)</sup>(1:18) 死んだとされ、「サタン」(ルカ22:3・ヨハネ13:27)の「器」<sup>(57)</sup>として捉えられているユダをして、イエス・キリストと「同じ、すぐれた若いもの」と言わせしめるのである。作品の終盤におけるユダの主張は、イエス・キリストのみならず、イエス・キリストを信仰の対象とするキリスト教に対する冒瀆であるとさえ言えるだろう。

イエス・キリストが「神に等しい存在」であることを踏まえれば、本作の「春の海辺」におけるイエスの言葉は、そのまま「神」の言葉であると捉えられる。そして、ユダによる裏切りの決意は、イエスさえも含んだ「人」の「理解」を拒むものであったとしても、「誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら」というイエスの言葉に合致していくのである。つまり、〈神の御子」<sup>(58)</sup>イエス」の言葉に、ユダの意志が重ねられてゆくと共に、〈神の御子」イエス」を媒体とする「天の父」の言葉にユダの裏切りの行為が組み込まれていくことを意味すると言えるだろう。ユダがイエスを「引き渡す」ことによつてのみ、「人の子」<sup>(59)</sup>として現れたイエスは死を迎え、「神に等しい」存在となることが可能となる。言うなれば、それがイエスの背負う役割であり、ユダに課せられた「義務」なのである。

ユダが感じた「怖れ」と自己「卑下」は、ユダの望みを遙かに上回りながら、「全世界の罪のための宥めの献げ物」(ヨハネの手紙2:2)へと自らを位置付け、ユダの望みを利用する形で、「預言されてある通りの形」の実現へとユダを取り込んでいく、「神に等しい」イエス・キリストに対して抱いた感情であると言えるだろう。イエスは、「あなたお一人」に「おわかりになつてゐて」ほしいというユダの望みを、「皆が潔ければいいのだが」と拒むことによつて、「復讐」という強い感情を呼び覚ますことをユダに要請してい



る。ユダは「予言されてある通りの形」の実現へと着実に誘導されていくのである。ユダが「あの人はいま、ケテロン川の小川の彼方、ゲツセマネの園に<sup>(63)</sup>ゐること、「弟子たちと共にゲツセマネの園に行き、いまごろは、きつと天へお祈りを捧げてゐる<sup>(64)</sup>」ことを伝えたまさにこの瞬間に、「復讐」、「義務」、「愛」とそれぞれの場面で意味づけられてきた密告は完了されようとしている。イエスの死をもって「神と人が和解し、本来の関係を回復する<sup>(65)</sup>」ための密告が、終えられようとしているのである。

「旦那さま」が〈聴き手〉に徹底するからこそ、ユダは「小鳥」の「声」に言及する。「夜に囀る小鳥」によって、イエスと「神の意志を行う」ためには欠けることのできない存在としてのユダという位相が、我々読者の前に明らかになるのである。

### 結論

ユダは「旦那さま」との対話を通じて、「神」の意志の中に取り込まれていく自らを発見する。「小鳥」の「声」に揺さぶられ、誘われたユダは、「怖れ」と自己「卑下」を振り払い、自らの望みを絶ち切つて、密告の行為を成し遂げる。

イエスは「十字架の死」によってどこまでも高みに上るのである

が、一方のユダは、イエスの思惑に取り込まれ、イエスの望みを叶えたにもかかわらず、自らの行いを悔やみながら死を迎え、十二弟子から脱落し、最もイエスから遠ざけられた存在となるのである。

作品の終結部において、ユダは「商人のユダ。へつへ、イスカリオテのユダ」と名乗り、密告を終える。この名乗りこそが、ユダとイエスとの隔たりを埋めがたいものにするともに、イエスがユダのもとから永遠に喪われることを決定するのである。「旦那さま」が、今まさに自らの前で密告をしているユダ本人に、その名を問うたのは、間違いないだろう。ユダは一度目に「商人のユダ」と答え、二度目に「イスカリオテのユダ」と答えている。作品冒頭と同じく、同じ内容を繰り返しているのがあるが、ここでのユダは作品冒頭部で見せた混乱の中には居ない。イエスと「神」の意志によって誘導され、「神」の意志の中に取り込まれていくこととなるユダは、あくまで「神」とイエスによって課せられた「商人」としてではなく、「イスカリオテのユダ」として、イエスを「三十銀」に換えることを選んでいく。

我々読者は、そのすべてを見届けた「旦那さま」を通じて、ユダが自らの認識を二転、三転させた末にたどりついた、最後の選択を目の当たりにしているのである。

【註】

- (1) 書誌は山内祥史「『駄込み訴へ』の書誌」に詳しい。なお、初出は『解釈』第十六卷六号（解釈学会・一九七〇年）だが、ここでは「『解釈』所収論文集 太宰治の文学」（教育出版センター・一九七三年）を参照した。
- (2) 「十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかと狙っていた。」（マルコ14・10―11）、「その時、十二人に数えられる一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿の管理者たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談した。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、機会を狙っていた。」（ルカ22・3―6）いずれも、日本聖書協会『聖書 聖書協会共同訳―旧約聖書統編付き』（日本聖書協会・二〇一八年）による。以降は、『旧約聖書』は書名と章・節を、『新約聖書』福音書の引用は福音書記者名と章・節、書簡の引用は書名と章・節を付す。
- (3) 太宰治が『駄込み訴へ』の執筆に際して四福音書のどの記述
- (4) 聖書引用一覧」をご確認願いたい。
- (5) 『解釈』二十五卷第二号・解釈学会・一九七九年
- (6) 『大学院研究年報』第二十七号・中央大学・一九九七年
- (7) 『季刊Jichiro』(二〇八卷・二〇一〇年十月) ここでは「太宰治の虚構」第9章「駄込み訴へ」論（和泉書院・二〇一五年）を参照した。
- (8) 『中京大学文学部紀要』(第四十三卷第二号・二〇〇九年) ここでは「太宰治〈語りの場〉という装置」第四章「駄込み訴へ」論―旦那さまの不在―（双文社出版・二〇一二年）を参照した。
- (9) 「駄込み訴へ」一四一頁
- (10) 同前
- (11) 「駄込み訴へ」一四〇頁
- (12) 同前
- (13) 「駄込み訴へ」一三〇頁
- (14) 同前
- (15) 「駄込み訴へ」一三二頁

- (16) 「駈込み訴へ」二二七頁
- (17) イエスと「マリヤ」に向けた感情については、拙論『あの人』の身体―太宰治『駈込み訴へ』論』（『フェリス女学院大学 日文大学院紀要』第二十五号・フェリス女学院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻・二〇二一年）において論じているため、詳細についてはご確認願いたい。
- (18) 「駈込み訴へ」二三三頁
- (19) 「駈込み訴へ」二三七頁
- (20) 同前
- (21) 「駈込み訴へ」二三八頁
- (22) 注17に同じ。
- (23) 原口尚彰『信じることと知ること―新しいキリスト教概説―』（東北大学出版会・二〇〇五年）第4章 キリストと救い」
- 「第5節 死と復活」（二二―二三頁）を参照した。
- (24) 「駈込み訴へ」二二九頁
- (25) 「駈込み訴へ」二三〇頁
- (26) 「駈込み訴へ」二三九頁
- (27) 「駈込み訴へ」二二八頁
- (28) 同前
- (29) 「駈込み訴へ」二四〇頁
- (30) 「私は、もともと貧しい商人ではありませんが、それでも、精神家といふものを理解してゐると思つてゐます」（『駈込み訴へ』二二七頁）
- (31) 注23に同じ。「第2章 聖書」第2節 旧約聖書概観」（五十―七頁）を参照した。
- (32) 同前（五十九頁）を参照した。
- (33) 注23に同じ。「第4節 聖書の学問的研究」（七十三頁）
- (34) 旧約・新約聖書大辞典編集委員会『旧約・新約聖書大辞典』（教文館・一九八九年）「イエス・キリスト」（一〇六頁）を参照した。
- (35) 注23に同じ。
- (36) 注34に同じ。「旧約聖書」（三七四頁）を参照した。
- (37) 「ゼカリヤ書」に記された「娘シオンよ、大いに喜べ。／娘エルサレムよ、喜び叫べ。／あなたの王があなたのところに来る。／彼は正しき者であつて、勝利を得る者。／へりくだって、ろばに乗ってくる／雖ろばの子、子ろばに乗つて。」（9：9）を引用し、「（前略）これこそは、『シオンの娘よ、懼るな、視よ、なんちの王は驢馬の子に乗りて来たり給ふ』と予言されてある通りの形なのだ、（後略）」（『駈込み訴へ』二三三頁）と説明している。

(38) 荒井献「ユダとは誰か——原始キリスト教と『ユダの福音書』

の中のユダ——」(岩波書店・二〇〇七年)「二章 イエスと

の再会—マタイ福音書のユダ—」では「マタイによる福音書」

第二十七章一節から十節のユダの縊死の描写に触れ、「血の地

所」の原因譚として「9—10節に引用されている聖句は、い

わゆる混合引用で、9節がゼカリヤ書(二13)からの、10節

後半が出エジプト記(九12後半)からの引用」としたうえで、

「ユダに関わる伝承の形成途上においてゼカリヤ書11章13節

に由来したことは確実であろう」と指摘している。(六十九—

七十頁)

(39) 同前。(七十頁)

(40) 『旧約聖書』「イザヤ書」では「イザヤ書」に「主なる神の

霊が私に臨んだ。／主が私に油を注いだからである。／苦

しむ人に良い知らせを伝えるため／主が私を遣わされた」

(61:1)と記される。旧約・新約聖書大事典編集委員会『旧

約・新約聖書大事典』(教文館・一九八九年)〔塗油〕八三—

頁・日本聖書協会『聖書・聖書協会共同訳』(日本聖書協会・

二〇一八年)「用語解説」(「キリスト」巻末二十八頁)によ

れば、「油を注がれた者」は本来、王を意味するものであつ

たが、転じて人々を導く者、すなわち救い主(「メシア」)を

意味するようになり、油を注がれた者は主の霊が下り、神聖  
性が与えられたとされている。

(41) 『旧約聖書』「詩編」には、「私が信頼していた友さえも／私

のパンを食べながら／威張つて私を足臑にします」(41:10)

と記される。また、イエス・キリストは「裏切り者の宣告」

の直前に「(前略)『私のパンを食べている者が、私を足臑に

した』という聖書の言葉は実現しなければならない(後略)」

(ヨハネ13:18)と述べている。

(42) 「つまみのパン屑を私の口に押し入れて、それがあいつの

せめてもの腹いせだつたのか。」(「駢込み訴へ」一四〇頁)

(43) 注17に同じ。

(44) 「駢込み訴へ」二二五頁

(45) 大國眞希「(鳥の聲)と銀貨—太宰治『駢込み訴へ』を中心

に」(『学芸 国語国文学』第四十六号・二〇一四年三月)

(46) 「その時、十二人の一人に数えられる一人で、イスカリオテ

と呼ばれるユダの中に、サタンが入った。」(ルカ22:3)「ユ

ダがパン切れを受けるや否や、サタンが彼の中に入った。イ

エスは「しようとしていることを、今すぐするがよい」と言

われた。」(ヨハネ13:27)

(47) 注38に同じ。石原綱成「ユダの図像学」では、「シュトウツ

- トガルト詩編』の写本挿絵、『ヴィスシャルドの戴冠典禮書写本』に、「鳥の形をした悪魔がユダの口の中に入っている作例」が見られることを指摘している。(二〇八頁)
- (48) 本文引用の三箇所と「その小鳥の正体を一目見たいと思ひました」(二四〇頁)、「ああ、小鳥の声が、うるさい」(二四一頁)、「どうして、こんなに小鳥が騒ぎまはつてゐるのだから」(同前)の計六箇所である。
- (49) 注34に同じ。「鳥」(八三三頁)
- (50) 「二羽の雀はニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。」(マタイ10:29)「五羽の雀はニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神の前で忘れられてはいない。」(ルカ12:6)
- (51) 「駢込み訴へ」二二七頁
- (52) 「いいえ、私は天の父にわかつて戴かなくても、また世間の者に知られなくても、ただ、あなたお一人さへ、おわかりになつてゐて下さつたなら、それでもう、よいのです。」(駢込み訴へ)二二七—二二八頁
- (53) 「駢込み訴へ」二二五頁
- (54) 注23に同じ。「第1章 信じることと学ぶこと」第4節 キリスト教信仰とは何か?」(三十頁)
- (55) 注34に同じ。「イエスにとって重要なのは神の意志を行うことである」と説明されている。
- (56) 注23に同じ。「第4章 キリスト教と救い」第1節 キリストの先在と受肉」(一〇四頁)
- (57) 「駢込み訴へ」一三三頁
- (58) 「そのころ、イエスを裏切つたユダは、イエスに有罪の判決が下つたのを知つて後悔し、銀貨三十枚を祭司長や長老たちに返そうとして、『私は罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました』と言つた。しかし彼らは、『我々の知つたことではない。お前の問題だ』と言つた。それで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んでそこを離れ、出て行つて、首をくくつた。」(マタイ27:5)
- (59) 「ところで、この男は不正を働いて得た報酬で土地を手に入れたのですが、そこに真つ逆様に落ちて、体が真つ二つに裂け、はらわたがみな出てしまいました。」(使徒言行録1:18)
- (60) 注38に同じ。「第4章 裏切と神の計画——ルカ福音書のユダ」では、『サタン』(＝悪魔)は、イエスがその公生涯のはじめ、荒野で試みに遭つた後、『時至るまで、彼(イエス)

から離れた」(四13)。この『時』がユダの『裏切りの時』なのである」としたうえで、ユダが「サタン」の器」であることを指摘している。(七十五頁)

- (61) 「新約では『メシア』『人の子』などと共にイエスに対する称号として用いられており(マコ1:1, 15:39)、イエスと父である神との特殊な関係を指す」(日本聖書協会『聖書・聖書協会共同訳』(日本聖書協会・二〇一八年)「用語解説」「神の子」巻末二十五―二十六頁)と説明される。また、『駄込み訴へ』においては「神の御子」と用いられる。「(駄込み訴へ)一三七頁)

- (62) 注61に同じ。「新約では多くの場合メシア(キリスト)を指す術語である。しかも、唯一の例外(使7:56)を除いて、すべてイエスの言葉の中に用いられ、イエス自身の呼び名とされた。これはイエスの受難(マコ8:31)、罪を赦す権威(マコ2:10)、受けるべき栄光(マコ8:38)を表す。「(人の子)巻末四十四頁)

- (63) 「駄込み訴へ」一四〇頁

- (64) 同前

- (65) 注23に同じ。「第4章 キリスト教と救い」「第1節 キリストの先在と受肉」(一〇四頁)